不退転

東江中学校

第 52 号
校長 久高利美子

第三十八回全国中学生作文コンテスト
沖縄県大会奨励賞　3年安里匡平さん

「いじめのグレーゾーン」

皆さんは「自分たちとは違うから」「話が合わなくてイライラするから」といった理由でいじめが許されると思いますか。そんなことは絶対にないと僕は思っています。どんな理由があろうと誰かをいじめるという行為は許されることではありません。

しかし、いじめている人が自分の友達だったとしたら皆さんはすぐに「やめろ」と声をかけることができますか。ぼくは、つい心の中で「いじめじゃなく、ただふざけあってるだけなのかも知れない」「あまり関わりたくないな」と思って沁みます。そして少し前までは、その人を助けたいという気持ちより、自分が変なフウに見られたくないという気持ちが勝ってしまいどうしても声をかけることができませんでした。しかし、ある出来事のおかげでその人を助けたいという気持ちが、自分が変なフウに見られたくないという気持ちよりも強くなりました。

中学二年生の時から同じクラスになった男子がいました。彼は知的障害を持っていて授業のスピードに追いつけなかったり、コミュニケーションが苦手だったりしましたが、他は僕たちと全然変わりません。僕が彼のことを気になりだしたのは、中学二年の二学期初め頃だったと思います。同じクラスの男子が三人くらいで彼をからかっているのを見たのが最初でした。その時は、ふざけて少しからかっているだけなのかなと思い、声をかけようとは思いませんでした。今思えば、そう思って関わりたくなかっただけかも知れません。

それから、そういう場面を見ることが増えてきました。さすがに僕もおかしいんじゃないかと思い始めました。しかも、そのからかっているだけと思っていた行為も日に日にエスカレートしていき、いつからかいじめにしか見えなくなってしまいました。しかし、ぼくはまだ「やめろ」と言うことができませんでした。この時点で彼がいじめられているというのはわかっていました。そのため、彼を助けたい、この場面で一声かけなければという思いは強くなっていました。そこまで思っているのになぜ声をかけられなかったかというと、そのいじめている人たちが僕の友達だったからです。僕の学校は一学年で三クラスしかないのでほとんどの人の良いところと悪いところも知っています。だから僕はこの場面で声をかけると関係が悪くなってしまうと思っていました。

それでも枯れに対する嫌がらせはひどくなっていきました。ぼくは、その場面を黙って見ている自分がとても腹立たしく感じました。ある日、「嫌がっているからもうやめてあげて」と言いました。何か言われるんじゃないかととても不安でしたが、「わかった」といってすぐにやめてくれました。

僕はこの時、彼のために一声かけることができて本当に良かったと思いました。この体験を通して、誰かがいじめられているのを見つけたらやめさせられるように僕が強くならないといけないと思いました。誰かがいじめられているのに気づいてあげるのも大切ですが、一声かけたあとに自分に嫌なことを言われても、我慢できるくらい心の強い人になりたいと思いました。次に同じような場面にあったときは、もう少し早く助けてあげられるでしょう。

また、いじめという行為はいじめている人が誰であろうと絶対に許せないと強く思いました。

最後に、いじめをなくすことはとても大切なことなのですが、いじめられた人を助けるまたは、フォローすることも大切なことだと思うようになりました。これからは、いじめられた人の支えに少しでも慣れるような人になりたいです。そして、いじめが社会からなくなることを心から願っています。

美術部作「ハートの赤い羽根！」生徒会を中心にしっかり募金活動に取り組んでいます。

十二月十一日（火）から十四日（金）に行われた三者面談。ご協力ありがとうございました。

十五日に行われたPTA三校親睦ソフトボール大会、お疲れ様でした。気持ちいい天気のもと行いました。